

フィレンツェで

海の向こうで暮らす

伊東史子

Fumiko Ito

ユエリ
職人になる



世界文化社

〜の向こうで暮らす

工業学院図書館
藏书章

フレンズで
職人になる

伊東史子

世界文化社

フイレンツェでジュエリー職人になる

一九九七年十月一日 初版第一刷発行

著 者 伊東史子

発行者 鈴木 勤

発 行 株式会社世界文化社

〒一〇二 東京都千代田区九段北四―二―二九
電話 〇三 (三三六二) 五一一五 (販売部)

印 刷 中央精版印刷株式会社

製 本 中央精版印刷株式会社

© Fumiko Ito 1997 Printed in Japan

ISBN4-418-97524-1

禁無断転載・複写

定価はカバーに表示してあります

1300円

フイレンツェでジュエリー職人になる

フィレンツェでジュエリー職人になる 目次

イタリアの呼ぶ声 7

ミラノと東京の谷間 8

変容する身体感覚 12

イタリアの呼ぶ声 15

父を見送り、見送られる 19

ミラノへ、そしてフィレンツェへ 21

レアルティ オラフエ..彫金学校 25

ジュエリーを手がかりに 26

かくして学校は始まる 28

居心地のいい場所 31

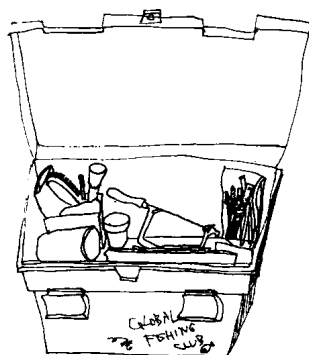
まずは指輪を作る 36

口ウ付け初体験 38

コンオツキオ..目で 41

銀と身体の一休感 43

翼を休める家 45



フィレンツェ、家探し 49

眺めのいい場所 50

建築の人格 52

敢行！不動産屋めぐり 55

フィレンツェ空き家事情 59

どの家にも物語がある 63

ここが私の住む所 67

ようこそ、私の家 71

泥棒とガス漏れ、そして水漏れ 76

イタリア人のできるまで 81

子供にもらう天上の味 82

シンプルな宇宙の秘密..家族 86

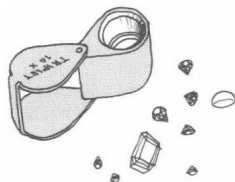
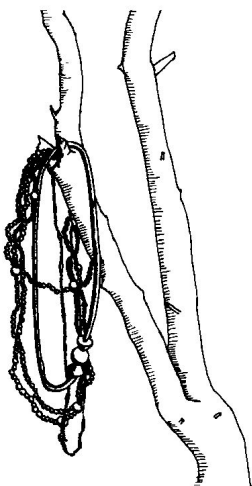
靴でつくるイタリア人 90

子供でもコース料理 93

キスのレッスン 96

内なる声を聞きたらう 99

小さな賢人 103



宝石鑑定

107

「ルビーでありうるかもしれない」

108

石の中を流れる時間

111

宝石の色

117

ヴェネツィアのマンマの石

120

ピッティ宮のコレクション

122

ラボラトリオの毎日

127

彫金師装束

128

とまどいのデザイン教室

132

銀まみれのマドンナ

136

怪我とのつきあい

139

同級生のおしゃれ

142

道具フェチ

144

マッサージコミュニケーション

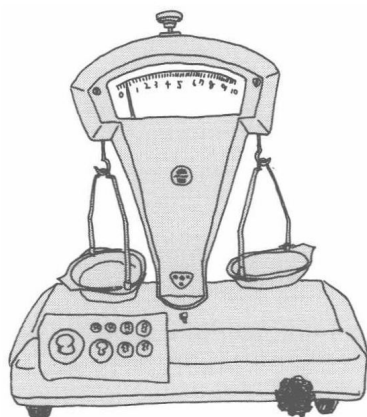
146

なぜ作るのだろう

151

レモンと煙草

152





フィレンツェ風物誌

自分が自分である才能 156

混乱そして展開 158

手が考える 160

渦巻きの人 164

鮎桃 166

171

彫金師見習いも街を歩けば 172

交通事故に遭う 176

イタリアの救急病院 179

青物市場のような病室にて 181

退院も楽じゃない 186

印を解く…春 189

天の色、地の色 192

あとがき 197

表紙・目次・扉デザイン 重原 隆
装画 荒井良二
挿画 佐瀬圭亮

イタリアの呼ぶ声

イタリアの呼ぶ声

ミラノと東京の谷間

夜半を過ぎると、電話がかかってきた。マイクからだ。彼のデザインした家具の製品化が決まって、メーカーが名前をつけるとのこと。どんなのがいいと思う？ 君はたくさん言葉を知ってるから、というのが彼の相談。彼はアメリカ人だが、イタリア、ミラノで建築の仕事をしている。いつもは建築かインテリアの設計をしているのだけれど、今回初めて、家具が彼個人の名前で世に出ることになる。

これは大きなニュースで、うわあ、すごい、どんなのができるの、声が弾む。いつもはファックスで手紙を書きあうけれど、特別のことがあると電話をかける。タイプされた手紙に交じて、彼の手書きの文字が届くだけで特別なのに、声が聞こえると、世界は別の見え方になる。

声は身体の一部だ。身体の中から出て、相手の身体に入っていく。たとえそれがデジタル化されてしまっても。

一日が終わり、ほっとして、白い紙に向かい、彼に手紙を書くのがいつからか日課のようになっていた。仕事でミラノに行くうちに、彼はとても大切な人になった。遠くにいても強い輝きを感じていた。なんの変哲もないA4の白い紙が彼につながる窓のように思われた。白い紙の前が彼にいちばん近い場所。

一日のねじを巻き戻しながら、窓を開け、字を書く毎日の小さな儀式。手書きの文字も身体の一部だ。ファックスだとインクもえんぴつもデジタル化されて、みんな同じ感熱紙に黒い線。それにどこか開封した手紙のような、完全にプライベートではない性格もある。それでもリアルタイムで、ジーツと出てくる紙の向こうに相手が立っているような不思議な錯覚にとらわれた（送っている人も本人とは限らないのに）。

新しい家具をあれこれ想像する。タイトルになりそうなコトバを考えてみる。件の家具は曲げガラスを使った背の高い飾り棚とのこと。

私は一九九一年から九四年にかけて、彼が共同経営者を務めるミラノのデザイン事務所の日本における代理人という仕事をしていた。要は日本の顧客との橋渡しをする役だ。私ひとりの小さな事務所兼住居は、電話とファックスとコンピュータだけで他にはなんにもない。部屋よ

り大きいと友人に笑われる大きな机に、必要なものは全部載せてある。

夕方六時、イタリアの朝一〇時、ミラノオフィスが開く時間が、私の日付変更線だ。朝一番までにミラノに必要な情報がファックスできるように、書類を作る。仕事の内容はデザイン会社のデザイン以外のあらゆる部分だ。クライアントの意向、問い合わせをまとめる、もちろん苦情もある、素材の調査、資料の翻訳、雑誌などへの新プロジェクト紹介のコーディネート、お金の交渉、たくさんの雑事。

そして毎日のように電話のやりとりがある。クライアントから催促されていることは、ファックスだけでは返事がとれないので、担当者が出かける前につかまえて話をしなくてはならない。建築、インテリア、プロダクト、グラフィックの各部門が、それぞれが独立しているので、同じプロジェクトに関わっていても、自動的に話が伝わるはずと期待してはいけない。こんな重要なことがなんで話題に上らなかったのだろう、なんて驚いているわけにはいかない。各責任者に動かぬ証拠文書を送り付け、ダメ押しする必要があることはひとりひとりに直接話す。書面だけでは伝わらないニュアンスや交渉事の展開や顛末なども、直接伝える。

日本のクライアントにはミラノの立場を説明し、ミラノにはクライアントの回し者のように話さなくてはならない。どちらとも心を砕いて話すのだが、気がつくと双方から矢面のような立場にいることがある。言い訳もするが、謝りすぎるわけにもいかない。それぞれの状況がわ

かつていても見えてないふりをする事だって必要だ。そして最終的には双方に益する成果が収獲されなければならぬのだ。

イソップ童話の蝙蝠が自分の優位を誇りすぎて、鳥からも動物からも仲間外れにされてしまう話を遠い記憶から思い出し、私は蝙蝠の逆バージョンではないのかと、考えてしまうことが時々あった。

私には重要な決定権があるわけでもなく、コミュニケーションをスムーズにするインターフェイスのような役割だ。それでも、ふたつのまったく異なる文化圏をまたぐ場所にいると、ふたつの離れた土俵で（あるいは丸い土俵と四角いリングで）相撲をとらせようとしている行司のようにになってしまう。がっぷり四つに組む前に、土俵を揃える作業をしなくてはならないのだ。

異文化ギャップはある程度の許容範囲とはいえ、文化交流活動をしているわけではないので、仕事の進行を妨げるものは少なければ少ないほどいい。しかも海外のデザインスタジオと共同作業をするゆえのポジティブなそしてエキゾチックな「刺激」は求められる。

「共通の土俵」の価値判断は相対的で、たくさんの視点、基準点が想定できる。が、正しいものなどひとつもなく、そしていつも時間がないので、かなりの部分、私自身の判断でしてしまう。かなり荒っぽい土木工事だ。しかも誰も見ていない。機能するかどうかは、仕事の進み具

合でわかる（海外との仕事の経験がある人は、「操作」に気づかないふりをしてくれたり、さりげなく評価してくれたりすることもあるが）。

変容する身体感覚

インターフェイスは優れたものほど、存在が感じられない。通訳もうまければうまいほど、見えなくなっていく。私は空気になるほど優秀なインターフェイスではなかったが、自分が透明になっていくのを感じることはままあった。たとえば、考え方が微妙に違う懸案がクリアされたとき、あるいは両国の男性連中が（ほとんどは男性陣だ）エロティックなジョークを飛ばすのを通訳して、リラックスした笑いに包まれるとき。

自分のリアリティはどこにあるだろうかと考えると、私は電話回線上の世界が想像されて仕方がなかった。ひとりでコンピュータに向かい、日本語の世界を英語の小さなパッケージにする。拙い語学力で、伝える内容はひどく矮小化される。しかも相手は英語圏の人間ではない（私たちのデザイン事務所はイタリア人が三分の一、後は世界各国から人材が集まっていて、多いときは十一カ国の人間がいた）。くどくど書いても読み飛ばされてしまうが、要点だけ送りつけても説得力がない。

ああ言えば、こう聞き返すだろう、この説明にはこうやって反論してくるだろう、このロジ

がかりだ。後になってから、時差なるものの存在を覚えておくべきだったのではないかと反省したりする。が、自分を霧のように細かく透明にして、外へ拡散させていけば、自由だし、疎外もない。何かの力に後押しされ、浮遊しながら飛び散る感覚で、私は宇宙とつながっていると思うことがよくあった。私が参加しているのは、今、目の前にあるデザインプロジェクトだけではない、地球や宇宙のムーブメントだ、と。この手の中の小さなコトが息づけば、その鼓動は全部の場所へ連動すると。

これは心理学でなんとかいう症状だったかもしれない。時空間把握がうまくできなくなるような傾向？ もともと私は閉所恐怖の気味があるし、方向音痴だ。右と左の区別がつかない（アメリカでは一〇万人にひとりぐらいの障害と認められるらしい）。体内時計も二四時間ではないのはうすうす気づいている。自分の身体的生理的感覚が遠くなる傾向？ スポーツもしないし、生まれてから一度も筋肉なんかついたことがない。肩凝りなんかも経験がないのでカラダに関してのリアリティが薄いのは確かだ。失感情症？ 何かのインプットがあると自動的に脳がぐるぐる動きだしてしまうのを、どこかで楽しんでいた。

この感触は、クラマタデザイン事務所にいたとき、遅くまで仕事をしてひとりで外に出ると、満月の夜で、疲れも忘れてうきうきと家に帰るときに経験した浮遊感だ。どこかでネガティブな気持ちやストレスのスイッチが入れ替わって、多幸症に見舞われる。